

流水原～知床岬からの縦走、1971年3月

京都大学山岳部（当時3回生）

山岸久雄

同志社大学山岳部の積雪期知床半島縦走講演に併せ、京都大学山岳部の知床半島の山行記録を2つ紹介します。一つは1952年12月、厳冬期に知床岳～知床岬間の初縦走に成功した記録です。この計画はヒマラヤ登山に挑戦するための極地法、耐寒訓練の具体化でもありました。もう一つは1971年3月、筆者が京都大学山岳部3回生に在籍中の山行で、前半は宇登呂から流水原（一部林道）をたどり知床岬へ至り、知床岳まで縦走し合泊へ下山。後半は羅臼で食糧デポを回収し、建根別（現在の岬町）から硫黄山～羅臼岳を縦走し岩尾別に下山、というものです。講演では2つの山行についてお話しますが、ここでは後者について説明します。

1960年代の後半、「山と溪谷」誌上に北大探検部が知床半島の流水原を歩いて一周した記録が掲載された。それを見た同期の佐藤に熱心に誘われ、流水原をアプローチとして知床岬に至り、そこから山脈を縦走する計画を立案した。流水歩きに興味を持つ部員6人が集まり、今は故人となった吉越OBにリーダーをお願いした。北大探検部OBの関尾さんのお話では流水原はスキーを使った方が安全とのことであったが、後半の山脈縦走でスキーを使いこなす自信が無かったためスキーは使用しないことにした。

流水原は平坦ではなく、厚さ1m以上もある氷板が、或るものは天を指し、或るものは海中に突っ込むように乱雑に重なり合い、その間を埋めるように、平坦な海水が途切れ途切れに続く。そのため、ルートはジグザグになり、一向に行程がはかどらない。流水歩きで難しいのは河口付近である。暖かい川の水が入り込むため、海水が薄くなり割れやすい。初日の上陸地点、岩尾別川河口では氷板を踏み抜き、胸まで水没する目にあった。海蝕崖が続く海岸で上陸地点を探すとすると、崖の切れ目＝河口となるため、上陸のたびに気を使う必要があった。岬が近づくにつれ、タコ岩、カシュニの滝など、見どころが増え、流水も平坦な部分が増え、歩き易くなった。5日目のポトピラペツ川付近でポロモイ番屋の越冬番お二人に会った。岩尾別までスキーで1日で行くとのこと。ここから先は遠浅の海岸が増え、海水がそのまま凍った平坦な海水（沿岸氷）が続き、歩き易い。6日目、遂に知床岬の台地に上陸した。丈の低い笹が冬枯れの姿で一面に広がっていた。岬を境に、羅臼側は湖のように静かな開水面が広がり、水鳥が群れていた。

知床岳までは強風の中、数時間行動してはキャンプと、小刻みに行程を進め、岬から4日目に登頂することができた。その日は一気にカモイウンベ川左岸の尾根を下り、合泊に着いたが無人集落であった。沖を見ると漁を終えたウニ採り船が次々と南へ帰ってゆく。その一隻に便乗させてもらい建根別でキャンプする。羅臼から食糧デポを回収し、後半の登山を開始。またもや強風のため小刻みに行程を進め、2日目に硫黄山の外輪山。5日目、一気に硫黄山、羅臼岳に登頂し、極楽平でキャンプ。翌日、岩尾別温泉に下山し、汗を流した。



図1 1971年知床山行のルートとキャンプ地

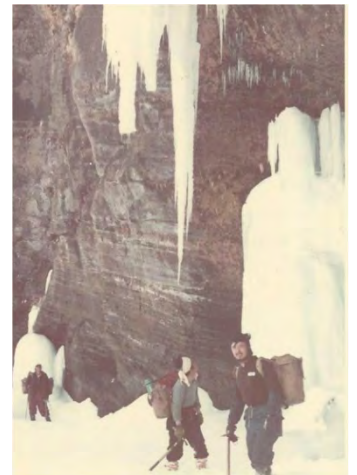


図2 チャカババイの岩壁の氷柱



図3 知床岬の台地と、沖合に広がる流水